診療局：内科《腎臓内科》

＜スタッフ紹介＞

役　　職	スタッフ名
主任部長兼血液浄化センター長	重松　隆
医　長	村津　淳
医　長	和田　龍也
医　員	大道　竜也
非常勤医員	岡本　幸大

＜特色と概要＞

腎臓内科の主たる業務は、大きくは腎臓内科領域と血液浄化領域の二つに分けられる。上記のごとく、2024年度は腎臓内科を標榜する医師5名で業務を行った。

腎臓内科領域では糸球体腎炎や慢性腎臓病（CKD）、重症高血圧症、糖尿病性腎臓病、薬物性腎障害、ネフローゼ症候群、うっ血性心不全や保存期治療可能な急性腎障害（AKI）に対する治療が中心で、患者同意のもとに可能なかぎり経皮的腎生検を施行して確定診断をつけ、末期腎不全への進行を阻止するため、降圧剤やステロイドや免疫抑制薬を駆使して治療を行っている。大阪府泉州地域では腎生検が可能な唯一の施設である。外来患者数も右肩上がりで上昇している。COVID-19蔓延により腎生検数は減少していたが、2023年度あたりから件数としても回復し、ほぼ毎週施行している。CKD患者に対しては、可能な限り透析回避と透析導入遅延を目標に、厳格な血圧のコントロールや食事療法、体液管理などを行う。

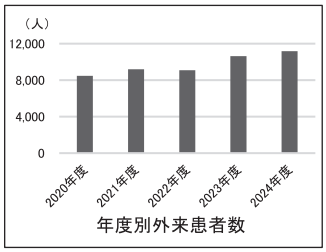
一方、血液浄化領域に関しては、末期腎不全患者に対して合併症のない適切な時期での腎代替療法導入を心がけている。主として血液浄化療法については血液浄化センターにて血液透析療法を始め診療を行っているが、最近では腎臓内科が主科の患者より、院内入院の他科の症例が過半数を占めるようになり、共同運営部門の色彩が強くなりつつある。他院での維持透析患者の併存症や合併症治療による当院への腎臓内科以外の入院患者の対応を行っている。特に重症の急性腎障害（AKI）は救命診療科、心臓血管外科、循環器内科などの症例が多い。地域医療にとって良いことかどうかは疑問の余地があるが、当科対応の症例数は徐々に増加しつつある。このように、腎臓内科はさまざまな合併症に関しては他診療科と連携をとり治療を行っている。

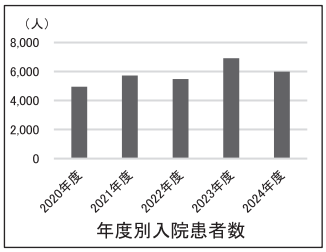
血液透析患者において最も重要なバスキュラー・アクセス（VA）に関しては新規の自己血管内シャント（AVF）造設から人工血管（AVG）移植、VAトラブルに対する再建術（AVF,AVG）や経皮的血管形成術（PTA）まですべて透析専門医でもある腎臓内科医が施行しており、多くは血管外科ないし泌尿器科の外科系医師による作成手術や管理が多い中、実際に透析医療に直接携わる腎臓内科によるバスキュラー・アクセス（VA）作成管理を行っている施設は、大阪府内では極めて稀で貴重な医療機関となっている。他院から紹介されるVAトラブルの症例に対しては迅速な対応を心がけており、時間外であっても直ちにPTAや手術を施行している。透析用カテーテル（短期型,長期型）も必要に応じて当科で挿入しているが、患者高齢化により徐々に選択例が増えつつある。詳細は以下のようになっている。透析以外の血液浄化療法に関しても、血症交換療法（単純血漿交換やLDLアフェレシス）も施行して積極的な治療を行っている。透析室以外でもICUにおいて急性腎障害を合併した重症患者に対して持続的緩徐血液浄化療法を施行している。腎臓だけに止まらず、さまざまな合併症を有した患者に対して、他診療科と連携して血液浄化療法を施行しながら全身管理を行い治療にあたるのが当科の特色であり、各医師も総合内科志向の強い「病気を診ずして病人を診る」を心がけている。

＜実績＞

患者数（外来及び入院、延べ人数の推移）　（人）

年度	外来		入院	
	延べ患者数	1日平均	延べ患者数	1日平均
2020年度	8,473	34.9	4,952	13.6
2021年度	9,187	38.0	5,720	15.7
2022年度	9,072	37.3	5,472	15.0
2023年度	10,621	43.7	6,906	18.9
2024年度	11,168	46.0	5,983	16.4





入院患者の疾患名と人数（主病名件数　上位 50 まで）
（期間 2024/4/1-2025/3/31 退院）

主病名（ICD10コード名）	ICD10	件数
慢性腎臓病，詳細不明	N189	72
慢性腎臓病，ステージ5	N185	38
ネフローゼ症候群，詳細不明	N049	27
肺炎，詳細不明	J189	23
反復性及び持続性血尿，その他	N028	16
尿路感染症，部位不明	N390	11
エマージェンシーコード U07.1	U071	11
腎及び尿管のその他の明示された障害	N288	9
慢性腎炎症候群，詳細不明	N039	9
急性尿細管間質性腎炎	N10	8
その他の呼吸器症状を伴うインフルエンザ，インフルエンザウイルスが分離されないもの	J111	7
食物及び吐物による肺臓炎	J690	7

主病名（ICD10コード名）	ICD10	件数
細菌性肺炎，詳細不明	J159	6
低浸透圧及び低ナトリウム血症	E871	6
単独タンパク＜蛋白＞尿	R80	6
アレルギー性紫斑病	D690	5
うっ血性心不全	I500	5
高カリウム＜K＞血症	E875	4
心臓及び血管のプロステーシス，挿入物及び移植片のその他の明示された合併症	T828	4
腎及び尿管の障害，詳細不明	N289	4
低カリウム＜K＞血症	E876	4
詳細不明の糖尿病，腎合併症を伴うもの	E142	4
急速進行性腎炎症候群，詳細不明	N019	3
処置に続発する感染症，他に分類されないもの	T814	3
慢性腎臓病，ステージ4	N184	3
詳細不明の血尿	R31	3
詳細不明の腎炎症候群，びまん性膜性糸球体腎炎	N052	3
詳細不明の腎炎症候群，詳細不明	N059	3
2型＜インスリン非依存性＞糖尿病＜NIDDM＞，腎合併症を伴うもの	E112	3
多発性のう＜嚢＞胞腎，常染色体優性	Q612	2
急速進行性腎炎症候群，びまん性半月体（形成）性糸球体腎炎	N017	2
急性腎不全，詳細不明	N179	2
失血による鉄欠乏性貧血（慢性）	D500	2
慢性閉塞性肺疾患，詳細不明	J449	2
その他の明示されたえ＜壊＞死性血管障害	M318	2
体液量減少（症）	E86	2
詳細不明の原因による胃腸炎及び大腸炎	A099	2
尿細管間質性腎炎，急性又は慢性と明示されないもの	N12	2
カルシウム代謝障害	E835	2
顕微鏡的多発（性）血管炎	M317	2
詳細不明の腎不全	N19	2
心不全，詳細不明	I509	2
多発性のう＜嚢＞胞腎，病型不明	Q613	2
悪心及び嘔吐	R11	1
その他の呼吸器症状を伴うインフルエンザ，その他のインフルエンザウイルスが分離されたもの	J101	1
浮腫，詳細不明	R609	1
喘息発作重積状態	J46	1
喘息，詳細不明	J459	1
気管支肺炎，詳細不明	J180	1
ウイルス性腸管感染症，詳細不明	A084	1

検査治療集計

診療明細名称	件数
新規バスキュラーAccess(VA)作成および再建	**60**
末梢動静脈瘻造設術（内シャント造設術）（単純なもの）	60
経皮的内シャント拡張術・血栓除去術	**324**
経皮的シャント拡張術・血栓除去術（1の実施後3月以内に実施する場合）	59
経皮的シャント拡張術・血栓除去術（初回）	265
経皮的腎生検	**60**
経皮的腎生検法	60
血液透析	**2,348**
人工腎臓（1日につき）（その他の場合）	1,284
人工腎臓（1日につき）（慢性維持透析を行った場合1）（4時間以上5時間未満）	913
人工腎臓（1日につき）（慢性維持透析を行った場合1）（4時間未満）	129
人工腎臓（1日につき）（慢性維持透析を行った場合1）（5時間以上）	22

＜今年度の反省と来年度への抱負＞

COVID-19の蔓延に対する診療が優先せざるをえなかった辛い時期を経て、通常の特に腎臓内科としての腎疾患の診断治療が一時期減少してしまった。ただ2023年度からほぼ現状に復帰し、2024年度には医師数増加も歴代でも最大の対応となった。この傾向を維持し、泉州地域では標榜科としての腎臓内科で腎生検を含む専門的な診療が行える唯一の施設として存在感を高めていきたい。

また近隣の血液透析療法等の血液浄化法を施行中症例の、種々の合併症や救急対応等当院が果たす役割は大きく、救急部門をはじめ他科部門と連携して対応をしている。近隣の透析療法施行されている医療機関のお助け機関としても存在感を高めていきたい。

最後に反省点を述べる。当院は日常診療はもとより救急対応機関としても存在感はあるものと自負している。腎臓内科もその中でも一定の役割を果たしてきた。一方で先端医学の実施機関として、新薬開発の治験や研究分野においては、腎臓内科の存在は残念ながらそれほど高いものではなかったが、新規薬剤の開発につながる臨床治験への積極的な関わりや市販後臨床調査にも関与できるようになってきた。今後はこうした研究をはじめ情報発信の強化に努めたい。まだまだ完全とは言い難い腎臓内科であるが、若い伸び代の多い医師が地域を中心に活動してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。